

フランス
甦るナント

都市再生への挑戦

菅野幸子

甦るナント 都市再生への挑戦

はじめに

本報告では、「文化による都市の再生」のフランスにおける事例として、近年、フランス国内においても大きく注目を浴びつつある都市ナント市を取り上げ、その都市計画と文化政策の関係に着目し、ナント市の果敢な都市再生への挑戦を調査した。調査にあたっては、ナント市の文化政策と文化事業を統括している同市文化局長のジャン＝ルイ・ボナン氏、また新しい文化や芸術を創造する実験所として知られる「リュウ・ユニック」館長のジャン・ブレーズ氏の両氏へのインタビューを行ったが、報告書執筆にあたっては両氏からいただいた関連資料とインターネットを通じてナント市のウェブサイトから入手した統計資料をもとにして報告する。

また、かつて在京フランス大使館に勤務され、現在、アート・マネージャーとして活躍されている山田ひろみ氏には、現地で入手した資料だけでは把握できない貴重な情報もご教示いただいた。記して、感謝したい。

目次

1. 都市再生への挑戦	34
(1) 歴史と背景	34
(2) グラスゴー・シンドローム	35
(3) エロー方式都市再生戦略	36
(4) ナント島プロジェクト	38
2. 都市計画における文化政策	40
(1) フランスの地方分権 ～ 国と地方自治体の文化政策	40
(2) ナント市の文化政策	41
(3) 芸術文化フェスティバル	43
(4) AFFAとの提携 ～ フェスティバルのパッケージ化	44
(5) 現代アートの実験場 ～ リュー・ユニック（唯一の場所）	45
3. 都市は甦る	49
(1) 都市の創造力と文化力	49
(2) 都市は甦る	51

1. 都市再生への挑戦

(1) 歴史と背景

ナント市は、大西洋に注ぐロワール河河口に位置し、ベイ・ドゥ・ラ・ロワール地方(人口350万)の中核都市として、近隣市町村を含めて人口56万を擁し、造船業をはじめとするフランス屈指の産業・工業都市として知られていた。しかし、近年、産業・工業都市のイメージから脱皮し、市民の生活の質を高める交通、経済、文化などに関わるさまざまなインフラが整備され、フランスで最も「住みやすい街」として知られるようになっていく。

歴史的には、15世紀までフランス王国からの独立を維持していたブルターニュ公の領地の中心として宮廷文化が栄え、1598年の「ナントの勅令」(政教分離法)の地としてもよく知られている。しかし、18世紀には、アフリカ、南北アメリカをつなぐ三角貿易、いわゆる奴隷売買の拠点として繁栄していたことも知られていた。

第二次世界大戦後、ナント市は、産業・工業都市として栄え、1950年代ともなるとワーキング・クラスの人口の多い街としてのイメージが強くなっていく。ところが、1970年代に入り、貿易や工業の中心であった港の機能がロワール河河口により近いサン・ナザール市へ移転すると、市内の造船所などは閉鎖に追い込まれ、大量の失業者が市内に溢れ、1980年代、ナント市は厳しい経済状況に直面せざるを得なかった。

この苦境に立たされたナント市を再生すべく、サンテルプランの首長を27年間務めたジャン・マルク・エロー(Jean-Marc Ayrault)氏が1989年市長選に出馬し、都市再生計画の柱として文化事業を据えることを公約として当選したのだ。エロー市長は、さっそく同市の経済の活性化、文化事業の振興などをめざして大規模な都市計画に着手した。現在、ナント市のみならず近隣の市町村とも協力して、市内のあちこちでいくつかの大規模プロジェクトが進行しているが、その象徴的な事業が、ナント市の中心、ロワール河の中洲にある「ナント島(イル・ド・ナント)」の大規模プロジェクトであり、またかつてのビスケット工場を改築し、同市の市民参加型文化政策を具現化し、さまざまな実験的な文化イベントを果敢に実施してきている文化施設「リユー・ユニック(Le Lieu Unique)」である。

そして、このナント市における都市再生計画においては、かつてのナント市のイメージからは最も遠いイメージにあった文化・芸術が重要な役割を果たしてきていることは注目に値する。もちろん、ナント市は古くから歴史遺産にも恵まれた街でもあるから、いまさらながらにその重要性を強調する必要はないのかもしれない。しかし、この文化・芸術という概念もまた、新たな観点から見直されているということなのである。それは、いわば「創造力」、「文化力」とも呼ばれるべき、市民社会における文化・芸術の力、そしてそこから生み出される創造力のダイナミズムを活かしての都市再生の試みであり、エロー方式と呼ばれるエロー市長の強力なリーダーシップのもとに、さまざまな分野で力強いリーダーシップを持つ市民や専門家、行政が連携しての都市再生への挑戦と実験がナント市で行われているのである。

(2) グラスゴー・シンドローム

しかし、この「文化による都市の再生」という発想は、ナント市独自のものではない。ナント市と同様に、1980年代、産業構造の変換に伴う造船業や繊維工業など重工業の衰退による不況にあえぎ、大量の失業者を抱え、労働者の街として知られていた英国のグラスゴー市が、1990年、EUから「欧州文化首都¹」に指名されたことを契機として、数多くの美術館や博物館の新設、モダンダンスや演劇など多彩な文化事業を創出し、産業・工業の都市から、英国でもロンドンに次ぐ一大文化都市へと変貌を遂げたことは欧州の都市計画関係者や文化事業関係者に多大な影響と衝撃を与えた。グローバリゼーションなどの影響による地域文化のアイデンティティの喪失、自然などの環境に配慮した持続可能な都市の発展などが議論されていた時代でもあり、世界各地で工業・産業重視の都市から、市民や地域の「生活の質」を重視し、市民の豊かな生活を目指す持続可能な発展が模索されていた。そこに、グラスゴー市が、質の高い文化・芸術と市民参加、さらにそれらが創作される過程において発揮される創造力、知力などのダイナミズムにより今後の都市再生計画の鍵となる文化産業やカルチュラル・ツーリズムなどを創出するなどの高い経済波及効果を生み出すとともに、都市の魅力とステータスを高め、他の地域の人々をも魅了することを実証したのだった。

以後、この文化や芸術を都市再生計画の核とする「文化による都市の再生」が各欧州各地で盛んに試みられることとなった。特に、従来型の産業・工業都市においては、重工業からサービス産業への転換という脱工業化の時代に直面し、新たな文化とアイデンティティを創出することが大きな課題でもあったため、バーミンガムやリバプールなどの英国の産業・工業都市をはじめとし、ドイツのルール地方、スペインのバルセロナなど多くの都市で同様の試みが積極的に行われた。こうして、かつて、最も「文化・芸術」のイメージから最も遠いところにあった産業・工業都市が、現在では最先端の「文化・芸術」を創造する都市となっている。ここで注目されるのは、いずれもなるべく多くの市民が文化や芸術にアクセスしやすい環境を整備したり、制作に参加するなど市民参加型の事業が政策や企画の中心となっており、まさに市民社会における市民の力をエンパワーメントし創造する事業となっていることである。

自らの地域を変えていくには、また、このような大規模なプロジェクトを実行するには、行政、専門家、市民のコンセンサスや、強力なイニシャティブとリーダーシップに加え、分野を横断してのチームワークと連携、柔軟な発想が必要となる。また、多くの工業地帯は公害や汚染にまみれた歴史も併せ持つ。その地域を、再び、緑豊かな地域に再生するためには、多くの市民がさまざまな形で協力し参加していかなければ実現不可能な作業である。

これが、いわば「グラスゴー・シンドローム」とも言うべき現象だが、造船製造などの重工業都市として、鉱山の輸出港として、そしてバスク地方というスペイン中央政府から自立した地域にありグラスゴー市と同様の課題を抱えていたビルバオ市も、また都市の再生を賭けて、ニューヨークにあるグッゲンハイム美術館を誘致することに成功し、フランク・O・ゲーリー設計のビルバオ・グッゲンハイム美術館を建設して以来、同市への観光客の急増、雇用機会の創出など経済への波及効果の増大、そして何よりも地域住民が自分たちが住む地域や都市に対する誇りを回復するなど、同市も、また「文化による都市の再生」

¹ 1985年、EU域内の各国の文化的アイデンティティの確立と相互理解を目指して設立され、毎年、EU加盟国の1都市が「欧州文化首都」として指名を受け、1年間、さまざまな芸術文化事業を開催している。従来はCultural City of Europeとして知られていたが、現在はEuropean Capitals of Cultureと呼ばれている。

を目指し、さらに壮大な計画を実行している。

英国のシンクタンクコメディアのチャールズ・ランドリーらは、欧州を始めとし、さまざまな都市や地域における再生の成功例の調査を数多く行ううち、多くの都市や地域が「文化」や「芸術」政策を都市再生戦略に取り入れていることに着目し、この文化・芸術が生み出される過程で発揮される「創造力」こそが、都市や地域を甦らせる原動力であると分析し、これらの都市を「クリエイティブ・シティ(創造都市)」と命名した。現在、英国を始めオーストラリアやカナダの諸都市、さらにベルリンやシンガポールなど世界の多くの都市政策に、この「クリエイティブ・シティ」という概念が取り入れられている。

そしてナント市もまた、グラスゴー市、ビルバオ市の事例に倣い、さらに、もともと文化事業が都市計画において大きな意義を持っていたフランスにおいて、この都市や地域が有する創造力に着目したのは当然のことといえる。

(3) エロー方式都市再生戦略

1982年の地方分権改革、そして83年の権限分権法の施行により、フランス国内では、従来の中央集権型の国家から、政府が持つさまざまな権限を地方自治体に委譲するなど地方分権化が進行し、以来、多くのプロジェクトが広域地方圏、あるいは市町村単位で実施されている。従って、ナント市やその広域地方圏で独自プロジェクトの実行が可能なのは、この地方分権制度により、各地方自治体が独自の予算を執行する裁量権を持っていることによる。また、広域地域圏内での循環型地域経済を創出することも目的としているので、中核都市の近隣の地方自治体も連携してより大型のプロジェクトの遂行も可能となっている。

そこで、ナント市も、ペイ・ド・ロワール地域広域圏の中核都市として同市を中心とする近隣の16の市町村とともにナント市圏を構成し、予算、事業なども時には共同で、またある場合は個別に実施している。たとえば人口8万人サン・ナザレ市はナント市から40kmのロワール河岸にあるが、大西洋に面し、ナント市にとっては重要や交通の要衝となっていることから、両市は文化面、観光面、経済面でも常に連携しあい、共同で多くのプロジェクトを実施している。

ナント市の都市再生計画は、フランス国内にあってても大規模な都市再生への革新的な挑戦ということで大きく注目を浴びているが、その遂行に当たっては、特に下記の8項目に重点が置かれている。

経済的・社会的波及効果が計られること

公共交通と都市計画の融合

公共空間デザインへの配慮

公共共同住宅(低所得者層の住宅)の改善

近隣地区とのバランスを考慮した都市デザイン

フランス公共事業省(Ministry of Public Works)は、ナント島再開発プロジェクトを新しい都市整備法を施行するに際して、実験的なプロジェクトとして注目していること

広い知見に立脚した実行力で遂行すること

革新的な挑戦として、同時多発的に複数地域にまたがったプロジェクトを実施すること

このようにいくつかの大規模プロジェクトがナント市およびその周辺で実行されているが、その実現にあたっては多くの課題や困難を抱えている。そこで、様々な困難な課題をいかに前向きに解決しながら、実現していけるかということだが、20年という長期にわたる忍耐力が必要とされている。また、実現のためには、執行機関である行政の手腕、そしてこのプロジェクトに対する市民の理解と支援が重要なのは言うまでもない。この都市再生計画を強力なリーダーシップのもとに推進しているのが、ジャン=マルク・エロー市長である。同市長は30年以上の長きにわたる首長としての深い経験と地域に対する理解をもち、この地域の活性化、都市再生のための実質的なプロジェクトを次々と実行してきている。その基本コンセプトは、地域および市民の「生活の質 (Quality of Life)」を高めることであり、いわば市民の目線にたった都市計画が行われている。

そして、このエロー市長のもとに、都市計画、経済、社会、文化などさまざまな分野の優れた専門家が集まり、それぞれのイニシャティブと裁量のもとにナント市を活性すべくさまざまなプロジェクトが実施されているのである。例えば、さまざまな文化事業や文化遺産を活用しての観光を促進し、豊かな文化を生み出すことによって町に活気を取り戻す施策や事業を統括している同市の文化局長には、ランス市「文化の家」事業部長、ラ・ロッシュェル市「文化の家」事務局長、プロワ市文化企画局長を歴任し文化政策、地方文化行政の専門家であるジャン=ルイ・ポナン氏が95年から登用されている。現在、同氏は、年間予算約4000万ユーロ（ナント市全体予算の11%を占める）スタッフ600人を抱え、ナント市文化事業全般に関し采配をふるっている。ポナン氏は、ジャック・ラング元文化相がプロワ市長として活躍した際に、同市の文化企画局長として活躍した経歴を持ち、フランス国内でも地方自治体の文化政策、文化事業の専門家として高い評価を得ている人物でもある。ポナン氏が率いるナント市文化局のスタッフもポナン氏以下、各分野の専門家がそろい、市の文化行政をつかさどっている。

さて、同市の具体的なさまざまな事業の実施にあたっては、エロー市長の強いトップ・ダウン方式が發揮されているが、その方法はトップ・ダウンとは言うものの、決して市長の独断で施策が決定されるわけではない。特に、後述の「フォル・ジョルネ (La Folle Journée)」といったフェスティバル、「リユー・ユニック」などは市民でもある民間の専門家たちから提案されたプロジェクトや事業を、ボトム・アップの事業として市が採用し、それを提案した専門家を責任者として登用し事業を委託する形で実施されている。これが、まさにエロー方式とも呼ばれるやり方であって、部下たる行政マンをはじめ市民から絶大な支持を得ている理由である。

また、エロー市長は、「文化」を都市計画の大きな柱とし、「ナント島プロジェクト」など大規模な都市再生計画を推進している。90年代初頭、ナント市が都市の新しいイメージやビジョンを模索する中、ジャン=マルク・エロー市長は、文化を中心とした都市計画を公約として1989年ナント市長に当選してことはすでに述べたが、その公約の一つとして文化イベントを増やすことを提案したのだった。すなわち、都市計画とフェスティバルなどの文化事業は表裏一体をなすものであり、都市の未来の担い手は市民であり、市民と行政が連携してさまざまな事業を実現することが都市の発展には重要であると考え、市民の自発性を尊重している。

同市長の考えによれば、例えば文化イベントは多くの観光客を集めることにもなるが、ただし、ナント

市民にとって地域の文化に対する誇りを持てる内容であること、国際的に開かれていることの二つが重要であるとしている。このような考えから、ナント市と交流の深い海外の姉妹都市からアーティストらを招くなどして、多彩な文化イベントが市内各地で開催されている。さらに、こういったイベントを市民がこれまで自分が足を踏み入れたことのない地区などでも開催することによって、街を再発見する機会となる仕組みなどが工夫されている。これは、単なる過去へのノスタルジーにとらわれることなく街の歴史を尊重することが大切なのであり、時間はかかっても、ナント市の持続可能な発展という考え方で実現することを目指している。その場合、グッゲンハイム・ビルバオ美術館のような非常に象徴的な事例を模倣するのではなく、市民を排除することなく、ナント市ならではの独自の方策を模索しつつ、観光客にとっても魅力あふれる都市づくりを目指している。実験的な色彩の強い文化イベントであっても開催する意義が認められれば、市長自らが議会を説得し率先して実行しており、その意味ではトップ・ダウン形式と言える。

これは、都市計画と文化力とも呼ぶべき文化や芸術が生み出すパワーやダイナミズムがうまく融合し、都市やそこに住む市民の潜在力や創造力を引き出し、さまざまな分野で活力を生み出す源となっている。

このエロー市長の牽引力により、ナント市の都市再生計画は大きく成功を収めつつあり、フランスの週刊誌「ル・ポワン」は、毎年、人口10万人以上の都市を対象に「フランスで最も住みやすい都市」のアンケート調査を実施しているが、「住居」、「娯楽」、「安全」、「教育」など12項目にわたる質問の総合点で、2003年、ナント市は国内第1位を獲得したと報じている。

また、1980年代、サービス産業の従事者はナント市全労働人口の67%であったが、2000年には、80%にまで増加した。さらに、若者の人口増加率が高くなっていることも注目される。また、文化施設や文化事業が充実しているということで、企業の本社がナントに移転してきている現象もおきている。

このように、ナント市の都市再生戦略は、文化力を活用することにより、21世紀という都市間競争が激しい時代において、都市としてのステータスの向上、イメージ・チェンジ、イノベーションの創出そして「生活の質の高さ」など、大きな社会的影響力、経済波及効果を着実に生み出している。



(4) ナント島(イル・ド・ナント)プロジェクト

さて、ナント市の都市再生プロジェクトの中心となっているのが、ナント市の中心を流れ、ナント市の歴史、経済、文化と深く関わりあってきたロワール河の中洲にあるナント島で進行中の大規模な再生プロジェクトである。

ナント島には、かつて造船所をはじめとし、多くの工場などが建設され、ナント市の経済の中心地として栄えていた。しかし、産業構造の転換により重工業が衰退し、1980年代には荒廃した地域となっていた。これを取り囲むロワール河も、また、汚染にまみれた川となっていた。そこで、この350ヘクタールものかつてのbrown fieldを、環境再生を考慮しつつ、文化、観光、レジャー、ウォータースポーツ、レストラン、公園を取り入れた「緑の島」に再生するという大規模な試みに挑んでいる。2001年1月から開始され、今後20年という長期にわたるもので、フランス国内でも類を見ない大規模な持続可能な都市再生プロジェクトとして知られている。

将来、このナント島は、ナント市とサン・ナザール市が構成する広域圏の中心として機能することが想定されており、再開発に当たっては、両市とそれを取り囲む近隣市町村も共同して実施されている。ナント市とサン・ナザール市の両市は、双方が対立することなく、さまざまな分野で補完し合い、相互発展を目指し、壮大な都市計画が進められている。

この大規模なプロジェクトの推進にあたっては、Alexandre ChemetoffとJean-Louis Berthomieuの二人の都市デザイナーがコンペの結果、全面的な委託を受け、実行にあっている。また、この一計画としてジャン・ヌーベル設計のナント裁判所もすでに建設されている。

しかしながら、このプロジェクトが実行される前から、市民たちとも何度も話し合いが持たれ、また、公共空間などのデザインにあたっては最初の段階からアーティストやデザイナーたちもこの計画に参加している。たとえば、1989年からナント市に本拠地を置く、ロワイアル・ドゥ・リュクス(Royal de Luxe)劇団は、荒唐無稽な機械を操って、それを巧みに操って野外でパフォーマンスを行うユニークな大道芸集団だが、彼らが描くユニークなテーマ・パークが、将来この緑豊かな島の中心となる予定となっている。このロワイアル・ドゥ・リュクス劇団は、大掛かりな高性能の機械を作り出し、それを駆使して世界各地で想像力に満ちたさまざまなプロジェクトを手がけ高い評価を得ているが、たとえば「ローマ兵のように歩ける機械」や、



ロワイアル・ドゥ・リュクス劇団

「拍手する機械」など一見人を食ったような機械群を作り出しているのだが、その意図とアイディアは高度に洗練され、美的センスとユーモアに裏打ちされた内容となっている。ディズニーランドとはまったく異なるコンセプトで子どもも大人も楽しめるテーマ・パークの創造をめざして、このアーティスト集団に公園づくりのアイディアが託されたのである。

2. 都市計画における文化政策

(1) フランスの地方分権 ～ 国と地方自治体の文化政策

さて、フランスにおける国と地方自治体の文化支援政策の関係をみると、現在、文化省と地方自治体が、フランス国内のさまざまな文化事業や文化施設の運営に助成金を交付し、支援している。もともとフランスは中央集権国家であり、伝統的に文化事業への手厚い支援が行われていることは知られるところである。

1959年、アンドレ・マルロー文化相により文化省が設立されたが、その設立目的は「人類にとり、またフランス人にとっても重要な作品にできるだけ多くの人に触れることができ、人々の生活や感性を豊かにする芸術や精神の作品の創造を奨励すること」からであった。また、文化活動は、一般の利益にかなうものであり、国や自治体などの公的機関が支援すべきものとの考えから、文化活動やアーティストへの支援は、公共サービスであると認識されている。また、文化遺産や伝統も重要であることは間違いないが、将来の文化遺産を創造する現代の若手アーティストの育成も重要とし、手厚い支援が行われている。

また、1969年から1981年にかけて、地方分権の動きが徐々に起こり、フランス各地に「文化の家」が建設された。「文化の家」の建物やその運営管理費に対し、国と地方自治体は折半して助成を行っていたが、この頃から地方自治体レベルでの文化政策が始まったと言われている。また、ジャック・ラングが文化相であった1982年から1983年にかけて、地方分権法が施行されたこともあり、文化のバリエーションを是正することを目的とし、文化省においても地方分散化が進み、地方圏議會を独自の権限を持つ行政執行母体とし、文化予算策定や意思決定に関し国家の権限が委譲された。これにより全国26の地方ごとに文化事業地方指導局（DRAC, Directions Régionales des Affaires Culturelles）が設置された。この時期は、また芸術が包含する領域が拡大した時期で、現代舞踊、現代音楽、そしてロック、ジャズ、コミックなどのポップ・カルチャーやサーカスなども芸術として認知されるようになったため、国家としても大衆文化を大々的に支援するようになり、文化省の予算も倍増し、国家予算の1%を占めるほどになった。この結果、都市レベルでの文化政策が推進され、市町村内での創作活動への支援が積極的に行われるようになった。現在では、文化省と地方自治体が共同で助成するとともに責任を分担し、さまざまな文化事業に対して支援を行っている。現在、文化支援における地方自治体の役割はますます大きくなり、地方自治体は文化省予算の約2.5倍の予算を文化活動に充当していると言われているほどである。

ちなみにフランス文化省の2003年度の予算は、24億9072ユーロ（約3312億6576万円、1ユーロ＝133円として算出）であり、日本の文化庁の年間予算は1003億3300万円であるから、約3倍である。しかし、2002年度は26億0228ユーロ、2001年度は25億4162ユーロとなっており、徐々に予算は削減され、同省が従来の手厚い文化支援政策を見直し、他国並に文化予算を削減、その結果、例えば休業補償制度が改革され、これに反対するアンテルミタン¹の大規模なストにより、2003年のアヴィニオン演劇祭、エクス・アン・プロヴァンス音楽祭など有名な芸術祭が中止に追いこまれたのは、これに起因するものである。

¹ 非常勤の俳優や舞台技術者など、年間507時間以上の仕事をしていれば、最大12ヶ月間仕事がなくとも失業保険として働いたときの平均日給の31.3%を失業保険として受け取ることができる

(2) ナント市の文化政策

さて、ナント市の文化政策に戻ると、同市の年間の文化予算は、ポナン氏からの情報によれば全体の11%（約53億3000万円）に相当するとのことだが、同市のウェブサイトからの情報によれば、2002年度の予算は367,070million ユーロであり、セクター別の割合は下記のとおりである。その内、文化予算はその15%を占めるとの数字が表されており、ナント市は文化関係に最も予算を割いていることがわかる。

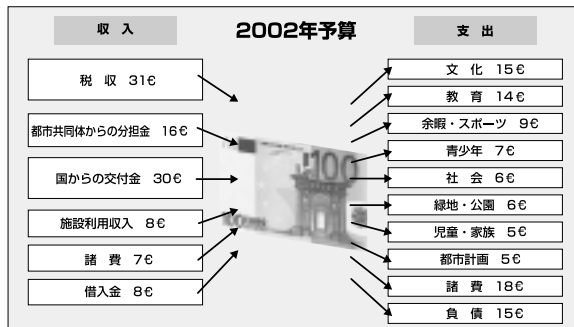
ちなみに表2は、2002年度の予算を100ユーロを基準とした各分野の収支表である。

表1 2002年度ナント市予算（セクターごとの内訳）

分野	割合(%)	金額(Euro)
文化	15	55,060,500
教育	14	51,389,800
余暇・スポーツ	9	33,036,300
青少年	7	25,694,900
社会	6	22,024,200
公園	6	22,024,200
児童と家族	5	18,353,500
都市計画	5	18,353,500
その他	18	66,072,600
負債	15	55,060,500
合計	100	367,070,000

* 1ユーロ=133円として算出。

表2 2002年ナント市の収支表（100フランを基準として）



ナント市はすでに述べたように、ペイ・ド・ロワール地域広域文化圏の中核都市として重要な役割を担っており、近隣の16コミューヌ（日本の市町村に該当）から構成されるナント市圏、さらにサン・ナザール

市（人口8万人）などを含めれば、ナント市で実施される文化事業の受益人口は約80万人となる。従って、ナント市の文化施設や文化事業には近隣の市町村からも補助金が交付されている。

さて、ポナン氏が定義する「文化政策」とは、「行動の哲学」とも言うべきものであり、「聡明で厳しく、豊かな知見を持ち、また他者の文化にも開かれており、文化を自分のものになりたいと思う市民」を育てることであるという。すなわち文化の消費者としての市民ということだけではなく、文化に関する議論にも参加できる見識のある、また目利きの市民を育成することである。そのためにはアート・エデュケーションやアウトリーチ活動などが果たす役割を重視し、またアーティストの創造力、想像力は非常に大きな影響力を持つことから市民とアーティストが出会うことは重要であるとしている。例えば、演劇振興政策とは、劇場を活性化し、常に人々が観劇しに訪れる場にすることであり、演劇人や役者との出会いの場を創出することとなる。

このような考えから、同市の文化政策の方針は以下の通りとなる。

① 創作活動を文化政策の中心・原動力とすること

文化遺産の保存・継承とともに、革新的な芸術の推進も重要である。しかし、公共政策にあっては、リスクを引き受けることにもなるが不可欠な活動である。従って、アーティストや演劇関係者に対し、演じる場所や公共空間の提供、活動助成を積極的に行う。

② 市民参加の促進

文化芸術活動への市民の参加と教育を重視すること。これまで演劇、コンサート、展示などに参加したことのない市民へのアウトリーチ、出会いの場と感動を創出することでもある。観客たる市民が芸術やアーティストにその質の高さを要求できるような目利きとなることが重要。しかし、これは芸術家を尊重し、かつ最高の創作活動が行われなければ実現できないことでもある。

③ 公的支援の必要性

国あるいは自治体は、市場とのバランスが取れるよう支援する必要がある。文化事業が商業的な市場だけに左右されると、画一化、標準化が起きやすくなるからであり、また、商業的な要素がより強いメディアや文化産業においては、内容やテーマのグローバル化、すなわち均質化につながる危惧がある。本来、文化事業というのは、利潤を追求したり、採算可能な商品ではないので、公的支援が必要となるのである。

そして、子どもや若者、高齢者でも気軽に参加できるような低料金を設定することにより、観客や観衆の層や質を変えていく必要がある。たとえば、オペラは、年齢層の高い人々だけではなく、高校生のオペラファンもいるので、若者も観劇できるような料金も設定することが必要となる。

④ 芸術家が暮らせるまちをめざして

創造的な活動を行っている芸術家との出会いや感動、そしてわくわくするような何か楽しいことがおきるのではないかと予感できるまちであることが大切。

⑤ 国際的に開かれていることの重要性

自分の住む地域だけでなく、より広い世界を知ること、世界にオープンであることが大切である。異なる文化を知ることにより、本当に革新的なことが発見できるのであり、開かれた姿勢こそが文化的・経済的ダイナミズムが生まれる契機となりうる。

⑥ 政策評価の必要性

文化事業の効果、経済的波及効果を調査する必要がある。例えば、観客への効果に関する評価を行うばかりでなく、議員、市議会、政治家、経済担当者に対しても、文化事業は間接的ながらも経済波及効果があることを実証する必要がある。

⑦ 文化遺産の活用

従来、文化遺産は修理・保存するものと考えられがちであったが、観光や開発とも大きく関連し、地域の歴史やアイデンティティ、都市のルーツへの理解にもつながるので上手に観光コースの設定などを企画する必要がある。さらに、産業遺産も「街の記憶」として、文化遺産と考えうる。

(3) 芸術文化フェスティバル

次にナント市で開催されている主要な3つのフェスティバルを下記に紹介する。

① 三大陸映画祭

これは、アジア、アフリカ、中南米の映画を上映するフェスティバルであり、2003年ですでに第25回を数え、長い歴史を有している。当初、冬の観光のオフシーズンに「まちおこし」を目的としたブラジル音楽祭が開催されたのだが、これにあわせて映画も上映したことから始まったという。アフリカ大陸、アジア大陸、中南米大陸の三大陸の裏には、ナント市の負の歴史である奴隷貿易の歴史が隠されているのだが、あえてその名前を前面に出すことにより、ポジティブに新たな歴史を作り出している。なお、ナント市の文化政策においては、人権や人類の尊重、他者の文化の尊重という考えを重視しており、映画祭の趣旨を尊重している。観客数は、約3万人にのぼる。

② 「書籍とアート (livre et l'art)」フェスティバル

これは、アート関連の書籍見本市で、毎年開催され、芸術関係の出版社、書店、若者、アーティスト、美術評論家が一堂に会する機会との定評があり、3日間にわたりフランス各地から関係者が集まる。開催期間には、専門家たちによる議論、朗読など多彩なイベントもあわせて開催されている。

③ フォル・ジョルネ (La Folle Journée)

さて、クラシック音楽のフェスティバルであるフォル・ジョルネ(「歓喜の日」の意味)だが、1995年

から毎年1月～2月の3日間にわたって開催されている「地域密着型」の音楽祭である。料金は、5～20ユーロと手ごろな価格帯に設定され、また無料コンサートも開催されていることから、誰でも気軽にコンサートに行くことが可能となっている。そのため、次第に人気が高まり、今ではチケットが入手しにくくなっていることから、2003年から2日間延長され5日間開催されることとなった。毎年特集する作曲家を選定しており、これまでベートーヴェン、バッハ、モーツァルトの年、あるいは19世紀のロシア音楽などが取り上げられている。2003年の特集はイタリアン・バロックだが、第10回目にあたる2004年の特集はロマン派のショパン、シューマン、メンデルスゾーン、リストの4人の音楽家に焦点が当てられた。毎年、テーマを設定するという方法は、実は美術館で美術作品が年代別の展示されていることからヒントを得たと言われる。期間中、1200人の演奏家が参加し、200回以上ものコンサートが、会場であるコンベンション・センター(La Cite des Congres)で開催される。会場内には、レストラン、関連CD・書籍の展示と販売、郵便局、演奏を放送するラジオ局まで設置されている。

もともとナント市では、国際ピアノフェスティバルなどが開催されていたが、これを運営していたのが1987年に設立されたCREAで、これは後述するリュウ・ユニックを運営するCRDC同様、Associatoin法にもとづいて設立された協会であるが、ディレクターのルネ・マルタンの発案により、ナント市からの助成を受けて1995年から開始された。音楽祭の芸術監督でもあるマルタンは、ユニークな企画力とアイデアで、クラシック音楽がロックやジャズと同じように、子どもから大人まで多くの市民が親しめるよう、そして地域密着型音楽祭というコンセプトを打ち出し、この音楽祭を成功に導いたとの定評がある。コンサートの時間を1公演45分するなど、なるべく多くのコンサートが開催されるよう工夫され、250組のオーケストラ、ソロ演奏、声楽などがリーズナブルな値段で楽しめる。1995年の第1回には、観客動員数は2万5千人だったのが、2年目には4万人、3年目には3倍にあたる8万人を動員するまでになり、急速に人気が高まった。今では、12万人もの観衆がフランス各地からこの音楽祭を目当てにナント市にやってくる。また、正確な数ではないとのことだが、観客の6割がナント市民、3割がフランス各地から、また残りの1割が海外からとなっている。現在では、このチケット収入が運営予算の約4～5割を占めるまでになっているという。

(4) AFFAとの提携 ~ フェスティバルのパッケージ化

この「フォル・ジョルネ」の成功により、音楽祭のコンセプトや枠組みがパッケージ化され、ポルトガルのリスボン市では2000年から、スペインのビルバオ市では2002年からそれぞれ地元の運営団体によって開催されている。さらに、東京でも近々開催が企画されているとも言われている。しかし、リスボン市やビルバオ市は、いわばこの音楽祭のパッケージを丸ごと買っているようなもので、これもフォル・ジョルネの運営の収入源となっている。

海外においても、この音楽祭のコンセプトと枠組みが歓迎されているということは、フランスの各地方自治体が企画する文化事業の内容とレベルの高さを裏付けるものであり、これらの文化事業をパッケージ化することにより一種の文化商品として売り出しているとも言えよう。芸術・文化事業も、また一つの文

化産業として輸出対象となりうるということかもしれない。この分野でも、芸術・文化は確実に経済波及効果を創出していることが例証されている。

なお、フランスの地方自治体で開催されている、先進的な、かつ特色ある文化プログラムや専門家を海外へ紹介するにあたり、フランス外務省所管のフランス芸術活動協会（AFFA）が仲介しており、ナント市などの地方公共団体と提携を結び、共同で海外でさまざまな文化事業を実施している。AFFAは1995年より、フランス国内のさまざまな地方自治体と共同で、海外へ、その地方自治体が企画開発した特色ある文化プログラムや専門家を海外に紹介し、さまざまな文化イベントを企画している。その最初の地方自治体のパートナーとして、ナント市が選ばれ、ベトナムでのフランス文化紹介事業では、リュウ・ユニックのディレクターであるジャン・ブレイズ氏が総合ディレクターとして指名され、さまざまなイベントを企画した。現在では、ナント市のほか、グルノーブル市、パリ市、リヨン市など多くの自治体がAFFAと共同で多くの文化事業をアルジェリア、南米、ロシア、アフリカなどの海外で開催してきている。

（5）現代アートの実験場 ～ リュウ・ユニック（唯一の場所）

つぎに、ナント市の現代アートの実験場として、フランス国内でもよく知られている文化施設「リュウ・ユニック（Le Lieu Unique）」を紹介する。

リュウ・ユニックはその名前の通り、他のどこにもない「唯一の場所」として現代アートの最前線を紹介する多彩なイベントの企画と運営を行っている。

このリュウ・ユニックは、1886年にナント市の実業家Jean-Romain Lefèvreによって建設されたビスケット工場であった跡を、ナント市が産業遺産として保存し、またそれを現代に活用するために買収し、2000年1月1日、現代アートの実験場「リュウ・ユニック」としてオープンした。このリュウ・ユニックという名前は、この工場で生産され、フランス中で愛されているビスケットの名前LUを残し、さらに前述したように「唯一の場所」とかけて命名されたものである。

この施設の歴史は、100年以上前にまでさかのぼるが、最初建設されたビスケット工場が移転したため、丁度100年後の1986年に工場が閉鎖され、取り壊す計画も検討されていた。当時、1990年代初頭、工場の広い空間が非常に魅力的だったため、ロワイアル・ドゥ・リュクス劇団の練習場として使用されたり、あるいはさまざまな文化団体が、ナント市から半ば公認されて「文化的不法占拠（スクワット）」をしたりしていた。しかし、1994年、ナント市の国立舞台（SN, Scène Nationale¹）であるCRDC（Centre de Recherche pour le Développement Culturel）がLes Allumées祭を開催する会場を探していたところ、この工場跡を発見した。このフェスティバルの会期中、多くの市民が来場し、



リュウ・ユニックの外観（上）と内部（下）

¹ 演劇、ダンス、サーカス、映画など多分野にわたり作品普及を行っている。初代文化大臣アンドレ・マルロー（59-69）によって設立された「文化の家（Maison de la Culture）」、ジャック・デュアメル文化大臣（71-73）によって軌道修正される中で創設された文化活動センター（CAC）を改編した施設。

この場は暑い熱気に包まれ、工場は再び生氣を取り戻したかのようににぎわった。もともとCRDCは、1984年に設立されて以来、固定した場所を持たず、遊牧民のようにナント市内の会場をあちこち移動して公演を行っていたのだが、この工場跡でこそ、自分たちが求めていたさまざまな革新的な試みできる場所であることに気づき、ここを会場としてさまざまなイベントを企画し、運営しようということになったのだった。そこで、現在のディレクターであるジャン・ブレイズ氏がエロー市長に対して、同市の文化事業に対してさまざまな提言を提出したところ、市がその提言を受け、1995年、このビスケット工場を買収したのだった。そして、1998年6月、若手建築家にこの工場の改築計画が委託され、この建物を象徴する塔や工場のイメージを最大限にいかした文化施設へ改築された。またリユー・ユニックを取り巻く環境は、日曜日に散策する歩行者のためのエリアとなり、市民が集える場所となった。改築費用は、65millionフランで、さほど高い金額でもなく、また短期間に工事も終了した。将来の使用にも対応し、手付かずの部分も残しておくなど、柔軟なやり方をとっている。特に、レンガ、配管、金属部分、階段などは、「時の痕跡」が残るよう、わざと一部をオリジナルな状態のままにとどめておくなど、工場の各所に細心の注意が払われて改築された。その結果、古い要素と最新の建築技術とが微妙に入り混じったまさにユニークな建物に生まれ変わり、創造性的な実験所とも言うべき文化と社会活動とが同時に行われるオルタナティブ・スペースが誕生したのだった。総面積8,821m²の施設は、さまざまな人々が集まる公共の空間として、チケット売り場、ブック・ショップ、バー、レストランなどがあり、「the Cour」と名づけられたスペース、「Grand Attier（大アトリエ）」と呼ばれる劇場、小さな音楽アンサンブルのリサイタルや会議などに使用できる完全防音の音楽室などから構成されている。「the Cour」は可動式パーティションにより、4000人の収容が可能となっている。大アトリエ(Grand Attier)は、長さ35メートル、幅17メートル、高さが13メートルという広い空間で、そのインテリアはフランスとアフリカの文化を融合させたようなエキゾチックな雰囲気を取り入れられ、500枚のアフリカのマリ国のテキスタイルがコンクリートの壁一面に貼られ暖か味のある壁となっている。その天井は、船板などの廃材を利用して作られ、独特の雰囲気をかもし出している。2階には、事務所、託児所が設けられている。

ナント市の方針として、このように市民に開かれた施設を建設する際に、留意することとして、「このような場所を作る事業には、アーティストを最初から参加させ、徐々に企画を練り上げ、場所に「心」を入れることが大切なのである。そして、その場を使いながら、平行して建築的にも内容、構造を改造していく」とのことであり、この哲学と精神をこのような文化施設に注入することが大切であるとし、単なる「箱物」にならないように考えられている。正に、アートと生活は乖離すべきではないとの考え方が反映された施設として、リユー・ユニックは存在しているのである。

こうして、このビスケット工場は破壊を免れた上、ナント市とCRDCの信頼関係をもとに、その運営がCRDCに全面的に委託された。ディレクターのジャン・ブレイズは、こう語る。「この場所は、劇場ばかりでなく、いつでも一般の人々に開かれている文化センターなのです。ナント市にあっては街角のビストロであり、ヨーロッパにあっては現代アートの中心であり、他のどこにもないユニークな場所なのです。アーティストは社会から隔離されているのではなく、人々や日常生活と常に接していることが大切なのです。以来、リユー・ユニックでは、市民が気軽に入出入りできる地域密着型の現代アートの実験場として

さまざまな文化活動が企画・運営されている。

センターの機能として一番重要なことは、市民に「文化」を押し付けるのではなく、あくまでも生活の一部として自然に存在できるような活動を行う文化センターであることであり、積極的にナントのまちづくりにも関わっている。なお、同センターはナント市及びフランス文化省から助成を受けて活動を行っており、常勤スタッフ数は35名で、プログラムの企画者、技術者、広報、コミュニケーション、総務などの部署がある。2002年度実績で、年間入場者数は約20万人。

そのリユー・ユニックの活動分野とその運営方針は下記の通り。

① ビジュアル・アーツ

地域的なテーマ、国際的なテーマなど多様なテーマを企画し、生きた芸術を提供するものとする。

2000年夏には、“Actif/Réactif La Creation vivante à Nantes” というテーマで、施設内のさまざまな場所をナント美術学校出身の若手アーティスト90人の作品でうずめるという展覧会が開催されたが、ナント市在住の若手アーティストたちに、サイト・スペシフィックな作品を制作する機会を提供するものとなった。

② 演劇・ダンス

なるべく多様な分野を網羅することも目的の一つで、演劇やダンスばかりでなく、サーカスなども上演される。国籍や民族にこだわらず、フランス人はもちろんのこと、さまざまな国籍のアーティストにレジデンスの機会が提供されている。たとえば、ダンスなどは伝統的な領域にとらわれることなく、身体の可能性を引き出すさまざまな試みのイベントが行われている。

③ 音楽

小規模なコンサートから大規模な国際的なフェスティバルまで多彩なイベントが企画されている。ジャズ、クラシックなどの確立された音楽から、実験的な音楽、さらにエレクトロニック音楽などもしばしば演奏され、その分野に造詣の深い聴衆を魅了している。

④ 文学

前述の“livre et l'art”展の会場となるほか、海外の作家が参加してのシンポジウムなど国際色豊かなイベントが行われている。

リユー・ユニックの2003年の年間予算

項目	日数	支出	収入	支出入差
造形美術展覧会	198	346,000	70,500	-275,500
ダンス公演	31	389,370	127,050	-262,320
音楽関係公演・イベント	40	347,600	98,800	-248,800
演劇公演	59	509,600	143,700	-365,900
書籍展、講座など	58	187,200	112,550	-74,650
その他、DJ、SLAM、デザイン展	196	228,300	121,200	-107,100
Nuit unique関連イベント		175,000	148,000	-27,000
芸能関係イベントの小計		2,183,070	821,600	-1,361,270
職員給与、保険、総合広報費など		1,784,590	103,000	-1,681,590
建物質貸料、維持費		814,200	93,500	-720,700
運営費小計		2,598,790	196,500	-2,402,290
ナント市からの助成（税込み）			2,759,330	2,759,330
文化省からの助成（税込み）			1,402,680	1,042,680
サン・エルブラン市からの助成			42,000	42,000
助成金合計（税込み）			3,844,010	3,844,010
助成金合計（税抜き 1.0437%）			3,683,060	3,683,060
取り置き分（インフレ分、助成金不足分の補填用）			80,500	80,500
総合計		4,781,860	4,781,860	0

収入の内98,000ユーロは、ナント市と書籍組合からの助成

内、ナント市への支払い1351,200ユーロ

*備考1 上記金額には税は含まれず

*備考2 なお、近隣都市のサン・エルブラン市からも助成されている

3. 都市は甦る

(1) 都市の創造力と文化力

ナント市は、上述の および の項でもみてきたように、新しい都市のイメージとアイデンティティを模索しつつ再生を図る上で、文化や芸術が生み出す力、すなわち創造力を重視し、都市計画に組み入れることによって、市民の「生活の質」を高めることによって、人々の豊かな人生を保障する社会の構築を目指し、果敢に都市再生に取り組んできている。

文化経済学者の佐々木雅幸や都市計画コンサルタントのチャールズ・ランドリーらによれば、21世紀においては、東京やロンドン、ニューヨークといった世界的な大規模都市より、「生活の質」を高め、多様性を認め合い、そして地域や市民の創造性と潜在的な能力を引き出す、人口30万～50万程度の人間的規模でありながら、独自の文化・芸術文化を育て、革新的な経済基盤を持つ「創造都市」への関心が集まっているという。

この「創造都市」で重要なことは、まず都市問題を解決するための創造的な風土をいかに作り上げ、創造的に解決していくかということであり、さらに芸術文化が持つ「創造的パワー」を活かしてその社会の潜在力をいかに引き出していくか、であるとされている。特に、都市の創造性にとって重要なことは、経済、文化、組織、金融などのあらゆる分野における創造的解決とその連鎖反応により、既存のシステムや発想を変化させる流動性だとしている。

さらに、佐々木は「創造都市」の定義として、「創造都市とは市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である」としている。

それでは、ナント市のこの都市再生の挑戦は、どれだけ「創造都市」の要件を満たしているのだろうか。ランドリーらは、都市計画において芸術文化のもつ創造性に着目した理由として下記の項目を列挙している。

脱工業化都市時代における、文化・情報・サービス産業の創出

芸術文化が市民に対し、問題解決に向けた創造的アイデアを刺激するなど、多面的にインパクトを与えること

新たなアイデンティティの創出、そして過去の記憶や伝統とのインタラクティブな関係を作り出すこと
地球環境との調和を図る「持続可能な都市」を創造していること

したがって、この4項目が、「創造都市」の要件を満たすものとなると思われる。そこで、各項目ごとに、ナント市の事例からその要件を検証してみたい。

① 文化産業などの創出

まず、文化産業の創出だが、ナント市はかつて、造船業など製造業を中心とする工業都市であったが、現在ではフォル・ジョルネなどの文化フェスティバルをパッケージ化し、海外の都市へ、いわば文化商品としての売り込みに成功しており新たな文化産業を創出していると言えよう。

② 芸術文化による創造的問題解決

ナント市の都市再生戦略を推進しているのは、まずエロー市長以下、専門家集団たる行政官、そして Alexandre Chemetoff などのランドスケープ・デザイナー、建築家やアーティストたち、さらにルネ・マルタンやジャン・ブレイズら豊かな企画力を持ち、創造性にあふれた民間のアート・ディレクターたちなど、実際に都市づくり、地域づくりに関わる決定権者たちである。このさまざまなセクターや分野にわたる専門家たちがナント市の都市再生ビジョンを完全に共有し、ナント市圏を豊かな都市へ再生するという共通の目的に向かい、あるときは共同、連携し、あるときは単独に事業を実施するという柔軟な実行力と、豊かな経験に裏打ちされた知識やノウハウを持っている。そこにあるのは相互への信頼と理解である。たとえば、エロー市長が、民間の立場であるルネ・マルタンやジャン・ブレイズを全面的に信頼し、それぞれの文化事業の運営を任せている。すなわち、個々が各分野でリーダーシップを取り、それぞれの役割と責任を果たして行動しているということである。

そして、このさまざまな能力を持つ人間たちの英知と行動力が結集されて、ナントという一都市を発展させるダイナミズムや活気が生み出されているのである。

たとえば、建物も人間も常に他者に関われており、「リユー・ユニック」のカフェやイベントには、いつでもさまざまな人々が集い、話しが弾み、コミュニケーションが生まれている。情報や知恵が個人に閉ざされず行き交い、活気と熱気が生まれており、人間が作り出す創造的なパワーが交錯しているのである。

さらに、ナント市文化局長のポナン氏は、この創造力を生み出す文化や芸術を理解するためには教育が重要と主張しているが、文化や芸術の質や内容のレベルを誰にでもわかりやすい安易なレベルに落としこむことなく、それを理解できる目利きの市民を育成することが重要だということなのである。市民をエンパワーメントすることが、その総体としての地域や都市のエンパワーメントにつながり、いかに創造的環境をつくりだしていくかということでもあろう。

③ 新たなアイデンティティの創出と、過去の記憶や伝統とのインタラクティブな関係

ナント市を象徴する文化施設であり、またアートの実験場としてのリユー・ユニックは、日本の文化施設のように、大金をかけて完全に整備された立派な文化施設では決していない。しかし、工場としての建物そのものの歴史や記憶、工業都市ナント市のアイデンティティを物語る建物として改築されている。そして、この建物も、人間や都市と同じように有機的に成長するものとして捉え、更なる改築の余地と可能性が残されている。

また、ここで開催されているさまざまな文化イベントは創造的な刺激に満ち溢れている。参加アーティストのレベルも高く、国際的な評価も着実に上がっている。日本のように先に建物が建設された上で、そ

れに見合うイベントが企画されるのではなく、もともと、文化事業が先に企画され実施されてきたわけで、いわばコンテンツやソフトが優先されてきたといえる。そして、さまざまな分野の人々が気軽に集まれ、立ち寄れる場であることを優先しており、建物内のしきりのほとんどは必ず隣の空間が見えるようになっており、常にオープンであることを優先している。そこで行われていることに自然に人々の視線と好奇心が集まり、人が集まる。このように、人が集まることにより、創造的な討論と情報の交換の場が創出されるのである。こうして、交流と伝播が自然派生する仕掛けが、建物にも企画にも巧みに仕込まれている。

まさに、リユー・ユニックは、過去の記憶や物語を現在に活かしつつ、新たなアイデンティティと創造的なエネルギーを生み出す空間となっているのである。

④ 持続可能な都市の創造

「ナント島プロジェクト」は、公害と汚染にまみれ褐色に荒廃した島を、市民が集える公園やテーマ・パークを中心とした緑の島へ甦らせる、20年という長期にわたる壮大な挑戦である。都市を、人間と同様に成長し発展する有機体として捉え、重工業から情報・サービス産業というパラダイムの転換期にあり、建物の歴史や記憶を尊重しつつ、新しい文化を作り出していく英断と挑戦、息の長い努力の積み重ね、土地に対する誇り、市民の生活を優先した、持続可能な都市の再生への挑戦の象徴的プロジェクトでもある。

(2) 都市は甦る

かつて多くの欧州の諸都市が、経済不況やパラダイムの転換などにより出口のない閉塞感と将来への不安を体験してきた。ナント市として例外ではなかったはずである。しかし、この報告に見られるように、ナント市は大胆な都市再生へ挑戦と不断の努力により、地域や市民の「生活の質」を高め、フランス国内で最も住みやすい都市と呼ばれるようにまでなった。まさに、都市や地域は、創造力を活かすことにより確実に甦ることが可能であることを実証しており、まさに「創造都市」にふさわしい。このことは、「ポワン(Le Point)」誌で、フランス一住みやすい都市に2年連続選ばれ、その最大の理由として、三大陸映画祭、Les Allumées、ロワイアル・ドゥ・リュクス劇団などナント市の文化の魅力があげられていることからわかるように、地域、社会、そしてそこに住む人々の「創造力」、「文化力」が、その都市を作り上げていくのであり、重要な役割を演じているのである。

この文化や芸術のイメージと関連する言葉として、“Creative”、“Creativity”がさまざまな場面で近年しばしば取り上げられるようになってきている。この言葉は、Knowledge Societyや創造性が問われる21世紀の社会を語る上で重要なキーワードとなっており、“Creative City”、“Creative Industry”、“Creative Age”、“Creative Class”など多彩な用語を生み出し、世界の最先端の情勢を表す言葉となっている。しかし、その創造性や創造性をはぐくむ重要な源の一つが、まさしく文化であり芸術であり、文化・芸術が本来有する柔軟な「創造力」や「発想」が、地域や人間にも求められており、今後の都市計画に不可欠であるという点でもある。

また、工業、産業などの分野は、従来は文化や芸術とは無関係とされる経済システムの中で発展してき

たが、都市や地域の衰退という現実に対し、「文化」や「芸術」の力の重要性に着目した欧米の都市政策者たちは、「創造力」というダイナミズムを巧みに都市戦略に取り入れ、「負」の遺産を「プラス」の財産へと発想の転換を図りつつ、文化産業や文化観光への波及効果も重視した上で、都市の再生を果たすことに成功しつつある。

このナント市の事例は、現在、市街地の空洞化、産業の空洞化、市町村合併などさまざまな課題を抱え、揺らいでいる日本の諸都市や地域にとっても、大きな示唆となるのではないだろうか。

私たちの住むこの日本には、歴史的にも、産業的にも、そして地域ごとにも多彩で豊かな文化遺産がある。ここに新しい文化や芸術を生み出すエネルギーが潜在していることは、現在、「クール・ジャパン」とも呼ばれる若者文化に代表されるアニメ、映画、現代アートなどに対する世界の注目を見ても明らかであり、まだまだ発掘されるべく多様な文化資源が眠っているのではないだろうか。この多様で豊かな文化資源をどのように都市再生に活用していくかの取り組みが各地で始まっているが、その成功の鍵を握るのは、わたしたち市民一人一人なのではないかと思われる。

参考文献：

- ・EUジャパンフェスト日本委員会「講演&座談会：文化政策でよみがえるフランスの地方都市/ナント市の再生」(2003.8.22)
- ・イヴ・レオナル「文化と社会：現代フランスの文化政策と文化経済」(植木浩・八木雅子訳、(社)日本芸能実演家団体協議会、2001.11)
- ・佐々木雅幸「創造都市への挑戦」(岩波書店、2001)
- ・杉浦幹男・花崎あゆみ「欧州音楽事情」(UFJ総合研究所 Arts Policy & Management No.17, 2003)
- ・友岡邦之「再考の時期にきたフランスの文化政策」(『地域創造 第9号』, 2000.10)
- ・Landry, Charles “The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators”, Comedia, 2000 (邦訳「創造的都市」後藤和子監訳、日本評論社、2003)

参考インターネット情報：

- ・ <http://www.nates.metropole.fr/>
- ・ <http://www.nates.fr/accneil/>
- ・ <http://www.lelieuunique.com/accneil/accneil.htmls>